

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学三年生の「わかば」は、実力よりひとつ上のランクの高校への入学を目指して、バレーボールの部活と学習塾「ソフィア」での勉強を両立させながらがんばっている。なお、「すみれ」は「わかば」の母、「雅人」は「わかば」の父であり、「麻耶」は「優菜」はいっしょに「ソフィア」に通う中学校の同級生である。

「ひとつのことがうまくいけば、案外もうひとつも勢いでやれる場合があります。」

部活のチーム分けのときに、岡野先生が言っていたことが本当だったのか、わかばのモチベーションはすこし変わった。

Aチームでスパイカーのひとりに加わったわかばは、勉強にもぐっとやる気が出てきた。これまで苦手であまり勉強してこなかった歴史も、暗記カードを作ったし、面倒くさくて考えることを途中でやめてしまっていた数学の文章問題も、なんとかねばってみる気になった。どんどん解答できるわけではなかったけれど、すくなくとも答案用紙に何か書けるようにはなった。

解答欄を白紙にしないということは、まえの塾でも言われていた基本だったが、ソフィアで時間の配分や解く順番を教わったことで、大きく改善した。計画的に解くことを心がけるようになると、時間が間に合わないということが少なくなった。

実際、ところどころ抜けているよりも、全部が埋まっている解答用紙のほうが、気持ちがいい。ましてや、ねばりにねばってぎりぎりで埋めた解答が正解だったときは、ひとしおうれしかった。

解答に対するあきらめない姿勢がついたせいも、一学期の中間テストでわかばの成績がぐんとあがった。返ってきた結果をたしかめたわかばもおどろいたが、

「すごいじゃないの、わかば！」

「おお、これは。」

結果を見たすみれも【I】をまんまるにし、雅人もびっくりしたような顔をした。

「六十番もあがってるじゃない。」

正確には五十八番アップだったけれど、すみれは二番ほど盛って大よろこびした。

「うん。自分でもびっくりした。」

「やっぱりやればできるのよ。」

すみれは確信めいた言い方をした。

「いままでわかばは欲がなかっただけなのよ。本当はできるの。」

① したり顔で言う。

「そう、なのかな？」

気恥ずかしくもあったが、素直にうれしかった。わかばはちよつと背筋を伸ばしたが、すみれはすかさず釘をさした。

「いままで臆病だったっていうか。まあ、せいっぱいやつてもできないとみじめだからね。欲のないふりをして自分を守ってたのかもね。」

「それはひどいんですけど。」

抗議をしつつ、心の底がちくんとしたのは、言われたことがかならずしもまちがっていないからだろうか。

「でもこのごろ、やる気が表に出てきたもの。攻めてる感じ。」

攻める。

たしかに、その単語は最近よくきく言葉ではある。部活で言われるし、自分でも言いきかせている。もっとも部活では、いざとなったらひるんでしまつて、強打で攻めきれないところもあるけれど、チャンスボールはねらうようになった。そんな姿勢が勉強のほうにも生きてきているのだろうか。

「自信がついたんじゃないか。自信は攻める勇気になるからな。」

「そうなのかあ。」

「自信を持って打つ」ことは大切だ。一瞬の迷いや弱気が、体をにぶらせるのは、経験上わかばも知っている。

「もっともつと伸びるわよ。遠慮なんかしないでいいんだからね。」

「う、うん。」

両親がよるこんでくれたことはうれしくはあったが、同時にわかばの胸にはふと、^② 苦いものもこみあげた。

わかばの胸にこみあげた苦いものは、数時間まえの記憶だ。中間テストの結果を返してもらったわかばは、すぐに麻耶の所に行った。あがった成績をみとめてほしかったのだ。

「麻耶ちゃん、どうだった？」

A [] ように走って行って、明るい声でたずねると、麻耶は顔をすこしひきつらせた。

そこでやめておけばよかったのだ。なのに、麻耶のようすが変わったのに気づいたにもかかわらず、わかばは無邪気に自分の成績カードを見せてしまった。

「ほら、見て。麻耶ちゃんに追いついたんじゃないかな。」

カードにすばやく目を走らせた麻耶は、顔をひきつらせたまま、まっ赤になった。

「麻耶ちゃん？」

③ 動揺したわかばに、

「……よかったね。」

麻耶は B ように言いおこし、教室から出ていってしまった。わかばにすれば、学校の席次も塾のクラスも自分より上の麻耶にみとめてもらいたいという一心だった。同じレベルになったことをよるこんでくれるんじゃないかとも思った。なのに、麻耶の反応は期待とは真逆のもので、とまどってしまった。

さらにわかばに追い打ちをかけたのが、優菜の意見だった。

「あゝ、わかばちゃん。下手打っちゃったね。」

麻耶が去ったあと、一部始終を見ていたらしい優菜が【Ⅱ】をしかめてやってきた。

「え？」

「麻耶ちゃん、成績下がったんだよ。あの感じじゃ、わかばちゃんよりわるかったんじゃない？」

「うそお。」

信じられない言葉にわかばは声をあげたものの、麻耶のようすを思いだしてみると【Ⅲ】を横には振れなかった。あれはたしかに強いショックを受けたような態度だった。

「もし逆の立場だったらって考えたらわかるんじゃない？」

優菜はさとすように言った。

もし逆の立場だったら。

「……うん。」

おちついて考えてみれば麻耶の気持ちもわかる。

自分よりも成績がわるかった人に、逆転されてしまったら。Bチームの人と入れかわることになってしまったら。

嫌だ。

みぞおちがしぼられたようになって、心が激しく波打った。④ こんな気持ちになったのは初めてだった。

これまでわかばは、ほかの人の成績や活躍をあまり気にする性質ではなかった。勉強やバレーができる人はいいなあと思わないことはなかったけれど、あまり深く考えたことはなかった。

すみれはそんなわかばのことを、「X」だから自己防衛のために臆病になっていたなんて言っただけれど、そのような

かもしれない。

勉強ができることやバレーがうまいことにこだわりすぎると自分がつらいから、あまり考えないようにしていたのかもしれない。

でもいま、自分の気持ちが変わっていることにわかばは気づいている。

せつかくあがった成績を落としたくないし、部活もBチームにはもどりたくないと思う。成績のほうは、落としたくないどころか、もっとあげたい気持ちになっている。

麻耶の顔を思いだすと、申し訳ないことをしたとは思った。けれども胸の内にこみあげた熱をおさえることはできなかった。

Y

わかばは自分の中に芽生えた感情を抱きしめるように感じとった。

（まはら三桃『つる子さんからの奨学金』より）

問一 【Ⅰ】～【Ⅲ】にあてはまる語としてそれぞれ適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 顔 イ 目 ウ 手 エ 耳 オ 首

問二 A 流れる B にはてはまる語としてそれぞれ適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 流れる イ ほほえむ ウ はねる エ 投げつける オ すべる

問三 線部①「したり顔で言う」とありますが、このときの「すみれ」の気持ちとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア わかばの成績があがって得意になる気持ち。 イ わかばがよるこんでいるのを注意する気持ち。

ウ わかばのテストの結果におどろく気持ち。 エ すみれがほめるのを気恥ずかしく思う気持ち。

問四 線部②「苦いものもこみあげた」とありますが、この「苦いもの」とはだれに対して、どのようなことをしたという思いですか。解答らんにあう言葉（二字と十字）を本文中からぬき出して答えなさい。

問五 線部③「動揺したわかばに」とありますが、なぜ「わかば」は動揺したのですか。理由を四十字以内で説明しなさい。

問六 線部④「こんな気持ち」とはどのような気持ちですか。四十五字以内で説明しなさい。

問七 X にはてはまる語句を本文中から十八字でぬき出しなさい。

問八 Y にはてはまる語句として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 麻耶にあやまりたい イ 部活でAチームにいたい

ウ 成績を落とさたくない エ もっと成績をあげたい

二 次の文章は食べられる食品が捨てられてしまう「食品ロス」について述べたものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

形が悪い、色合いがよくない、傷がついているなど、見た目が悪いために捨てられる食品があります。「見た目」にも、市場に出すための^a基準があるので。加工食品だけでなく、自然のなかで育つ農産物や海でとれる魚介類、酪農家や養豚家などが育てる家畜にもそのような基準がついて回ります。サイズの大小、いびつな形、傷などは、自然にできたものなのでしかたがないと思うのですが、私たちの社会は①それを許しません。

A まがったキュウリがあるとしましょう。見た目が悪いといって買い手がつかない、大きさや重さが揃いだと値段をつけにくい、袋に入れにくいしかさばるから流通の際に傷がつきやすいなどという理由で、流通過程で「※規格外」として処分されます。いっぽう規格を満たす作物を出荷すれば、市場に流通する作物の品質は保たれ、消費者の※購買意欲も増し、結果、お店にも利益が入ると、一見するといふことづくめのようにも思えます。その陰で、多くの食品ロスが生まれていることをのぞけば、です。

そうした現状を変えようとする取り組みが、今、行われつつあります。規格外の野菜や果物を活用する取り組みです。

② あるケーキ屋さんでは、台風などで外側に傷がついた果物を買取り、新しく商品化して販売しています。たとえば、商品として出荷できなくなった桃でかき水を作ったり、同じように市場に出せないイチジクでタルトを作ったりしています。そうして販売をしたところ、いずれも評判になり、そして大好評の商品となりました。少し値段は高めですが、規格外が発生した時だけの期間限定であることや、これまで食べたことのないような味（エダマメのかき水！）もあり、そのサプライズ感が大人気となったのです。

果実は大きく育てるために一部の実を小さいうちに摘み取り（摘果といいますが）、その多くは捨てられてきました。しかしこの摘果果実は、確実にかつ安定して手に入ります。それに目を付けたこのケーキさんは、定番の商品に利用するようにもしました。

農家は大雨や日照不足にそなえて、多めに種や苗を植えることがあります。結果、すべての作物が順調に育つと農産物が穫れすぎてしまいます。農産物が必要以上に市場に出荷されると価格が下がり、輸送代すら出ないほど低価格になり、作っただけ損をする「豊作貧乏」といわれる状態に陥ります。そのため出荷をやめる農家もあります。すると農産物は収穫されずに、トラクターなどでそのまま畑にすき込んで土にかえす「産地廃棄」がなされます。

③ このような農産物の廃棄問題を一朝一夕に解決するのは難しいといわれています。なぜなら、規格外農産物の廃棄や産地廃棄は、もともと農家の※所得を維持するために始まっているからです。高い値段で農産物が売れないと日本の農業の衰退に直結します。B、たんに食品ロスを減らすだけでなく、規格外の農産物であっても、また産地廃棄をしなくても利益が十分出るように工夫しなければなりません。一つの考え方ですが、規格を維持して「規格外農産物」として安売りするのではなく、規格を緩くして安くしすぎないで売る「規格緩和」ができれば、作る人にとってもモチベーションを維持することができるかもしれません。規格緩和されて出荷数が増えた分の過剰な作付けをやめれば、作業負担は軽くなり、産地廃棄を減らすこともできると思っています。また、利益もそれなりに出せるはずですよ。

そして余った土地で、時期をずらして収穫できる農産物を作るようにすれば、利益も出やすくなりますし、リスクも回避できます。C 消費者もいろんな種類の農産物を楽しめるようになります。国の調査によれば、規格外等の農水産物を購入したことがあると回答した人は約八割に上ります（消費者庁「物価モニター調査」二〇二〇年）。一方、購入しなかった人に理由を聞くと「」の回答が大半を占めました。「消費者はまがったキュウリを買わない」というより、生産者や業者の人たちが「まがったキュウリを売る工夫や努力をしてこなかった」という面もあったのかもしれない。

大量に作った食べものを安く販売することは、モノが足りない時代には、社会的にも意味のあることでしたが、モノ余りの時代になり、⑤その悪い面が目につくようになりました。たとえば、予定していた出荷先から突然注文のキャンセルを受けたとします。数個のキャンセルなら、ほかの出荷先を探すこともできますが、何千、何万という膨大な個数となると別の出荷先を探すことは難しくなります。食品であれば、賞味期限というタイムリミットもあります。大量のものを扱うということは、細かく必要な人に届けることが難しくなることでもあり、食品ロスが発生しやすくなるのです。さて、食品ロスがいきつくとどこだと思えますか？ それはゴミの処分場です。あなたは、あなたが住んでいる自治体のゴミ処分場を見たことがありますか？

日本の処分場は、生ゴミも焼却してくれるので、便利かつ、衛生面でもとても優れています。衛生状態が悪い国は、経済発展しないといわれています。その点、日本は世界でもトップクラスの清潔な環境を作ること成功しています。これは世界に誇れることですが、一方で、焼却した後の燃えカスを捨てる⑥「最終処分場」の※枯渇という問題があります。つまりゴミを捨てられる状況は永遠に続くものではないことも認識する必要があります。

隣国の韓国・ソウル市では、焼却処分場の建設が住民の反対によって実現しなかったため、食品リサイクルを推進しています。その一例が家庭から出る生ゴミをリサイクルした、豚やペットのエサです。さらに、生ゴミを出す量に応じてお金を支払わなければならないことになっています。（中略）ソウル市のマンションのゴミ捨て場にはゴミの計量器と、重量に応じてクレジットカードでお金を支払うシステムが整備されています。かつて韓国は生ゴミを含んだゴミを海洋投棄したり、埋め立てたりしたため、水質の悪化や地下水の汚染という社会問題を抱えていました。が、二〇〇五年に埋め立てを、二〇一三年には海洋投棄を禁止し、さらに先の工夫を積み重ねた結果、問題を克服しつつあります。

（小林富雄『食品ロスはなぜ減らないの？』より）

（注）規格外：一定のきまりを外れたもの。
 購買意欲：何かを買おうとする気持ち。
 所得：もうけたお金のこと。
 衰退：おとろえること。
 枯渇：尽きてなくなることを。

問一 — A — C — にはあてはまる語句をそれぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そのため イ たとえば ウ そして エ それとも

問二 — に入る語句として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 味がおいしくないから イ 形が整っていないから

ウ 色がきれいではないから エ 買えるところがないから

問三 — 線部 a 「基準」・ b 「状態」とはどのような意味ですか。適切なものをそれぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

a 「基準」ア 見た目がよくて整っていること イ 満たさなければならぬ決められた条件

ウ 食品の味に関する取り決め エ 食品がチエックを受けること

b 「状態」ア お金に困っている様子 イ 努力しても損をすること

ウ 物事のありさま エ 好ましくない様子になること

問四 — 線部①「それ」とはどのようなことをさすのですか。十六字で本文中からぬき出して答えなさい。

問五 — 線部②「あるケーキ屋さん」の取り組みについての説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 商品として出荷できなくなった果物を買取り、新しく商品に活用して販売している。

イ 台風で外側に傷がついた果物を買取り、店頭で規格外の果実として並べて販売している。

ウ 新しい商品が好評だったので、安く販売するために外側に傷がついた果物を利用するようになった。

エ これまで食べたことのないような味を出すために、外側に傷がついた規格外の果物を利用している。

問六 — 線部③「このような農産物の廃棄問題」とありますが、「規格外の農産物の廃棄」以外に具体的にどのような問題のことですか。四十字以内で答えなさい。

問七 — 線部④「規格緩和」とありますが、筆者は「規格緩和」にはどのようなよい点があると考えていますか。説明としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 出荷数が増えた分の過剰な作付けをやめれば、作業負担が軽くなる。

イ 余った土地で時期をずらして収穫できる農産物を作れば利益も出やすい。

ウ 生産者の利益が上がり、消費者も農作物を安く購入することができる。

エ 消費者がいろんな種類の農産物を楽しむことができるようになる。

問八 — 線部⑤「その悪い面」とありますが、その内容についてまとめられている一文をぬき出し、最初と最後の五文字を答えなさい。

問九 — 線部⑥「『最終処分場』の枯渇」とありますが、韓国・ソウル市では生ゴミに対してどのような対策がなされているのですか。四十字以内で答えなさい。

三 次の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直しなさい。

- | | |
|------------------|-----------------|
| ① 田畑をタガヤす。 | ② 今後についてトウロンする。 |
| ③ サイフを取り出す。 | ④ うわさをヒテイする。 |
| ⑤ テイアンを受け入れる。 | ⑥ ジドウでドアが開く。 |
| ⑦ 庭でウサギをカウ。 | ⑧ スンボウを測る。 |
| ⑨ シュクシヨウとして印刷する。 | ⑩ 遠足でシロを見学する。 |
| ⑪ 磁石を使った実験。 | ⑫ 森で宝を見つける。 |
| ⑬ 新たな制度の誕生。 | ⑭ 臨時の列車に乗る。 |
| ⑮ 瀬戸内海の沿岸を旅する。 | |

問題は以上です。